巻頭言

コロナ禍の今こそ、心は常に人に寄り添える消防であれ

大阪市消防局長　小西　一功

今年も残すところあと１か月となり、消防機関の皆様は新型コロナウイルス感染症対応や歳末の公務等、何かとご多忙の時期と存じます。今年最後の寄稿を務めさせていただくということで、ここであらためて１年を顧みます。

新型コロナウイルス感染症拡大始期から２年が経過いたしますが、その猛威はいまだ収束せず、この１年も消防にとっては大変厳しいものとなりました。

まさに国難とも言える新型コロナウイルス感染症が、全国的にまん延し、皆様におかれましても、それぞれ対応に苦慮され、また、大変大きな影響を受けた１年であったことと存じます。今、我々消防機関は、大変難しい局面に立たされています。今般の新型コロナウイルス感染症に伴う人々の行動変容、ＩＣＴやＩＯＴの急激な進化、労働力人口の減少による働き方改革といったパラダイムシフトに適応するために、これまでの慣例や常識も覆す変革が求められているところです。

これらの状況を踏まえ、コロナ禍の中、その流行収束後を見据え、今、解決すべき課題も、それぞれに沢山あることと存じます。消防機関相互の連携・協力を大切に、それらの課題に真摯に向き合い、取り組んでいくこと、その一つ一つの積み重ねこそが、複雑多様化する災害の発生に備えた消防力強化の礎になるものと考えております。

一方で、近年、風水害や土砂災害が激甚化し、発生が懸念される南海トラフ巨大地震等の大規模自然災害への防災対策は、このコロナ禍においてもしっかりと備えていかなければなりません。

大阪市消防局では、空の防災対策として、日本の消防機関では初採用となるエアバス・ヘリコプターズ社製EC155B1型救助消防ヘリコプターを更新配備し、９月から運用を開始しました。

次に、陸・水上の防災対策として日本初の水上を航行できる大型水陸両用車が総務省消防庁から配備され、令和４年４月１日の運用開始に向け、操作訓練などを実施しています。

これら救助消防ヘリコプターや大型水陸両用車は、全国各地に緊急消防援助隊として派遣し、効果的な活用ができるよう、有事の際における機械部隊の体制強化に取り組んでおります。

ここ数年、消防は、新型コロナウイルス感染症や大規模自然災害発生時の対応では、予断を許さぬ大変厳しい状況に立たされておりますが、我々消防の使命は変わることはありません。初代・大阪市消防局長が示した局是「明・強・敏（明るけく　共に励みて強からめ　いざ立つときは敏く応えて）」を基本理念とし、これまで築き上げてきた歴史や伝統を継承しながら、社会の変化にあわせて、柔軟かつ積極的に対応していくとともに、市民が安心して暮らせる「災害に強いまち・安全な都市」を目指して日々取り組んでまいります。

最後に、新型コロナウイルス感染症の拡大は市民生活に変化を与え、地域防災研修や式典、各種啓発イベントなどが中止や縮小となり、市民と消防職員の物理的な距離を遠くしがちです。ワクチン接種は進んでまいりましたが、平穏な日常生活はまだ遠く、今後もコロナ対策は継続することでしょう。しかし、このようなコロナ禍の今こそ、心の距離は密にし、心は常に人に寄り添える消防であるべきと考えております。